保険毎日新聞「みちくさ保険物語」098

「青天を衝け」と保険－渋沢栄一と東洋生命

今年の大河ドラマ「青天を衝け」は、巧みな脚本や魅力あるキャストの力も手伝って、明治時代に入りますます佳境となっている。わが国のビジネスの初期の発展において渋沢栄一が果たした貢献は強調してもしきれない。保険に関しても、日本で最初の保険会社である東京海上の設立に関与するなど重要な役割を演じた。しかし、生命保険に関しては他業と比べると、間接的な関与にとどまり、大きな影響力を行使したとまではいえない。

渋沢との関連がとりわけ深い会社は、東洋生命保険株式会社（以下「東洋生命」と略記）である。東洋生命は、明治 33 年 10 月に共慶生命保険株式会社として設立され、明治 37 年に東洋生命と改称された。中堅生保として大正期から昭和初期にかけての生保業史に一定の存在感をしめしたが、昭和 11 年 9 月に帝国生命保険株式会社に契約包括移転され、その姿を消した。同時代の書物である稲見泰治『保険はどこへ』（文雅堂、1926 年）と同社による『東洋生命案内（昭和 7 年版）』から、その歴史を簡単に振り返ってみよう。

尾高次郎が、共慶の経営を引き受け、明治 43 年 7 月に社長に就任する。この生命保険会社は、渋沢栄一という後ろ盾をもって繁栄の第一歩を踏み出すことになった。稲見泰治によれば、「渋沢翁の愛婿尾高次郎が社長に就任してから始めて(ママ)活気を呈するに至った」（『同上書』50 頁）。大正期に生じた都市化が生命保険市場に与えた影響は大きいことが指摘されているが、尾高が経営に乗り出した時期はまさにこの時期であった。「渋沢大御所を相談役として擔ぎ上げ、それに繋がる第一銀行の背景を巧みに利用し、一時は都市を通じて可なりの勢力を張った」（『同上書』）。尾高次郎の時代に、東洋生命は、中堅生保としての地歩を固めたといえる。尾高次郎社長名の契約者への年賀状の画像を掲載した（大正 2 年）。

ところで尾高次郎の実父は、尾高惇忠であり、養父は尾高幸五郎。妻は渋沢栄一の娘（三女）の文子である。「青天を衝け」の視聴者ならご存じの通り、尾高惇忠の妹の千代は、コレラで亡くなった渋沢栄一の最初の妻、千代である。文子は、千代の実子ではなく庶子。文子と同腹の庶子、妹（四女）の照子は富士製紙社長をつとめた大川平八郎に嫁している。

ちなみに尾高次郎は、日本の現代音楽の作曲家に与えられる作曲賞である尾高賞に名を遺す、39 歳で早逝した指揮者・作曲家の尾高尚忠（ひさただ）の父である。ということは、今年の 2 月に亡くなった、曾祖父と同名の作曲家、尾高惇忠（あつただ）と指揮者の尾高忠明の祖父である。尾高家は、歴史に名を残こした人物をこの他にも輩出しているが、ここでは省略させていただく。

東洋生命の経営に戻ろう。尾高次郎(1866-1920)は惇忠の次男だが、親族の尾高幸五郎の養子となり、家督を相続した。明治 24 年に東京高等商業（現在の一橋大学）を卒業し、渋沢の第一銀行に入行。東洋生命は、尾高次郎が社長に就任して目覚ましく発展した。しかし次郎が亡くなる頃には、必ずしも順風満帆の経営ではなかった。第一次大戦後の「財界の反動」により業績が混乱し、とくに専務が「やるだけやって引責辞任」（稲見『前掲書』50 頁）し、業績は低迷した。その後、尾高次郎の子息豊作が経営にあたったが、稲見の記述によれ

ば、生保経営を操縦するにたる経験がなく、業績不振と混乱に拍車をかけたようだ。

大正 11 年 7 月に、経営の立て直しのため「渋沢子爵の慫慂によって」（『東洋生命案内』昭和 7 年版、7 頁）専務取締役とし木村雄次が新任された。同氏は、「堅実第一主義を堅く持し、以って契約者の利益を保護し、猶進んで十分に契約者の為を計らなければならない」（『同上』）という信念をもって経営にあたった。さらに、「大英断を以って、野外実務機関及び内務事務の整備統一を行うと共に、旧契約の整理を断行し、保険契約の最大なるよりは最良なる事を旨として、極力その改善につくする一方で、第一銀行頭取佐々木勇之助氏を相談役に迎えて渋沢子爵、佐々木相談役の監督指導の下に全く陣容を新たにし、正々堂々意義ある活動を開始した」（『同上』7 頁）という。

大正 12 年の関東大震災が同社に与えた打撃も小さいものではなかった。震災時に対応については、次のようなエピソードが残されている。「震災の際幸いにも在社して居った木村社長(ママ)は、契約者擁護のため断然妻子等を顧みる處なく、社内に踏止まり自ら決死隊を率ゐいて、崩壊せる土蔵を切破って重要書類を全部搬出し、直ちに車両数台に之を満載してあらゆる辛苦を嘗め、辛じて猛火の中を上野公園内に避難し、更に王子の渋沢子爵邸内の安全地帯に移す事が出来、金庫も社長の適宜の処置に依って焼け落ちず、在中の有価證券等は全部無事なるを得た」（『同上』8 頁）。

木村雄次専務取締役は、その後の混乱を収拾した結果、「渋沢子爵、佐々木相談役並びに重役の推挙によって社長の椅子に就き、徐ろに、しかも堅実なる歩調の下に、積極的活動は開始」（『同上』9 頁）された。

『東洋生命案内（昭和 7 年版）』の裏表紙には、顧問だった故渋沢子爵、佐々木相談役おおび木村社長の写真が掲載されているので参照されたい。また同社の発展を示すものとして、京橋区にあった土蔵造りの旧本社と大手町に新築された近代建築の新本社の画像を掲載した。

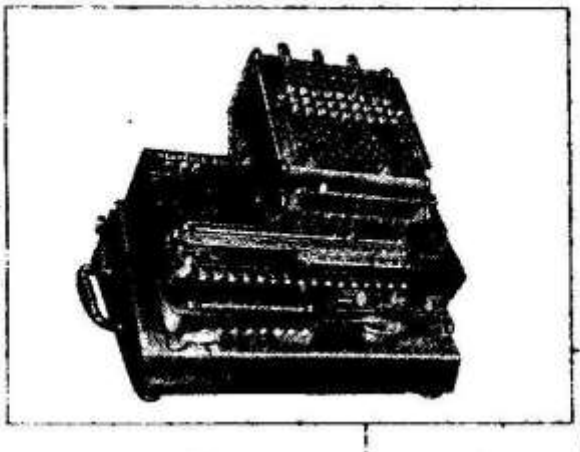
木村社長の「積極的活動」が、昭和恐慌期において実を結んだとはいえないが、特筆すべきこととして、事務組織の近代化をあげられる。最後に掲載した資料から、同社が、パワーズ集計機やメルセデス計算機を、比較的早く導入していることが知られる。これらの事務機器は、日本生命をはじめとして大手の生命保険会社が戦前に導入していたが、同社もその流れに遅れることがなかった。にもかかわらず、渋沢および第一銀行が支援した東洋生命は、大輪の花を咲かせることができなかったのである。

大正 2 年の契約者向け年賀状

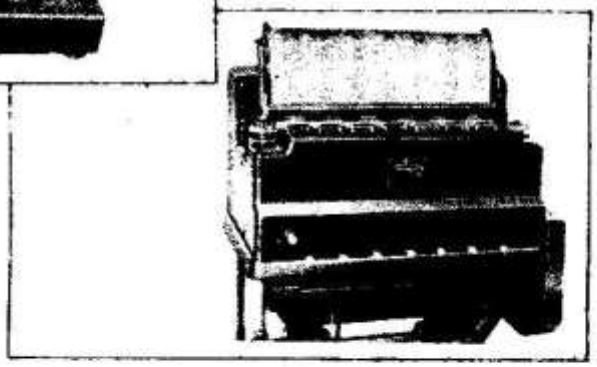
故渋沢子爵、佐々木相談役、木村社長の写真。『東洋生命案内(昭和 7 年版)』より

京橋区の旧社屋。『生命保険契約案内』（発行年不詳）裏表紙。

『東洋生命案内（昭和 10 年版)』表紙



スーワパ
機計集
↓



↑
スデセルメ
機算計

我社は科學的經營法により、出來るだけ能率的に仕事を執つてをります。文明の利器はなるたけ利用してゐますが、とりわけ統計課の米國製パワース集計機は、面倒な數字を自由自在に自働的に而も短時間に分配し、計算しその上印刷までして表が出來てくる最も精巧な機械であります。

又獨逸製のメルセデス・オイクリツド計算機は、世界最新の計算機で、八桁位の乗除は、二十秒もかゝらない内に、自働的に正確な答が出て來ます。

此等の機械は、まだあまり日本で使用されてゐませんが、我社では逸早く使用して非常に能率を高め、經費を節減し、利益を增加せしめて、以て契約者各位のお爲めを計つてをります。

『東洋生命案内』より転載